

柏谷で探す「鎌倉殿の13人」

鎌倉殿・源頼朝ゆかりの地を

ここ柏谷で探してみました！

2022年のNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」では、伊豆の国市を中心とした伊豆地域一帯が、ドラマの重要な舞台となっていました。初代鎌倉殿の源頼朝や北条氏にゆかりの地は、伊豆の国市、三島市、三島大社、願成寺、法華寺などがあり、我が函南町にも高源寺（桑原）、北条宗時・狩野茂光の墓（大竹）、仁田忠常の墓（仁田）などがあります。今回は、ここ柏谷には何があるのでしょうか。『鎌倉殿の13人』ゆかりの地」を

六万部寺

柏谷公園と函南東中学校の間にある向原の丘の上に建つ六万部寺は、日蓮宗の歴史のあるお寺でその昔は尼寺であったといわれています。



説は様々ありますが、ここには六万部寺に伝わる「王城万部寺」の縁起に記された伝承と稲妻堂に紹約した部分があります。城山六万部王



寺に伝わる源頼朝像

寺縁起」は、今から360年ほど前の江戸時代初期に、六万部寺を再興した日了上人の求めに応じ、京都の高名な僧であった元政上人（がんせいしょうにん）が加筆修正したものであると伝わっています。

頼朝公経塚

平安時代末期の1160年、源氏と平氏の戦いである平治の乱で平清盛に敗れ、父である源義朝を殺された頼朝は、伊豆に流罪となりました。流罪となった頼朝は、伊豆権現（現在の伊豆山神社）の妙法尼から法華経を習い、



六万部寺の経塚

父の冥福と源氏の再興を願って日々経を怠りませんでした。頼朝14歳の時、それから19年が経ち、頼朝は33歳になりました。この年（1179年）京都から文覚上人が流罪となつて伊豆（奈古谷国清寺）にやつて来しました。頼朝は文覚に言いました。「父や源氏一門は平清盛に殺され、私も京都から遠く伊豆に追いやられました。武士をやめ僧になつて先祖を弔いたいのです。それが私の願いです。」すると文覚は頼朝をじっと見つめて言いました。「頼朝公は必ず天下の総大将になるお方です。その幸運を捨ててはいけません。僧になつてはいけません。」そして文覚上人は、袋の中から殺された父義朝の髑髏（どくろ）を取り出して頼朝に見せました。「髑髏でありながらも父に会うことができたのは、日夜法華経を読み願った誠心が仏に通じた結果である。感応の賜である。」と頼朝は言つて涙を流しました。

桑原薬師堂 ～里人の厚い信仰心によって守られた仏像群～



かつて室内にあった仏像の写真が飾られている現在の薬師堂の内部

桑原の長源寺の境内に薬師堂があります。明治初期に起きた廃仏毀釈（仏教を排除しようとする運動）により、桑原にあった新光寺、平清寺が廃止されたため、寺にあった多くの仏像が同地区内の高源寺や長源寺に移され守られました。その後、廃仏毀釈の動きも収まった明治の終わりになり、これらの仏像群の散逸を防ぎ、後世に保存継承していくため、桑原の有志により、長源寺境内の山の中腹に薬師堂が建てられました。薬師堂に納められた仏像群の内、「阿弥陀三尊像」は、源頼朝の義父である北条時政が、石橋山合戦で死亡した息子の北条宗時慰霊のため、慶派の仏師である実慶に造像させたと考えられています。桑原区では、平安時代の「薬師如来像」や鎌倉時代の「阿弥陀三尊像」など二十四体の貴重な仏像群が、里人の厚い信仰心に支えられながら守られてきました。二十四体の仏像群は、平成20年に桑原区から函南町に寄付され、平成24年に開館した「 kannami no mi 里美術館」に展示されています。

区外でも探しました！

地神様

柏谷の地神様は、東中の東側の小山の上にあります。長寿会作成の縁起札には、「文覚尚人が源頼朝を伴つて、この場所から富士山を展望し、『天下人たる者は、あの富士の様に泰然として人々から畏敬される仁徳を持たなければならぬ。』と教えた。」と、文覚上人と頼朝の関係が記されています。縁起札には続けて「後に文覚らしき

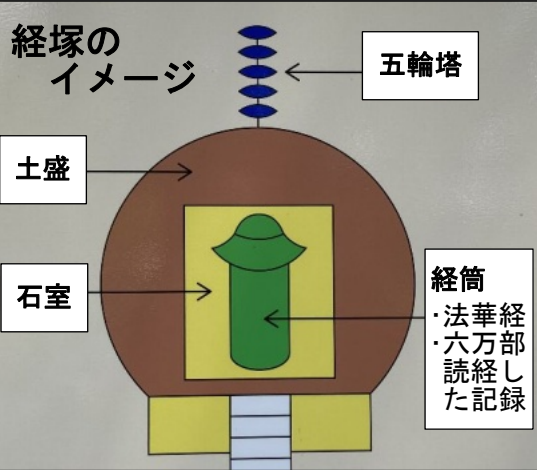


「〇埴安命」と彫られた石碑

怪僧が、水利法を教え、荒地を水田に変え、収穫を数倍にした。その怪僧は、死後、地神として埴安之神と共に祀られた。」とあります。そして、生前、怪僧はこの丘に立ち、田に映る美しい月を見て「故郷のようだ」と大層喜んだということ。現在、地神様に立つ石碑には、「埴安命（はにやすのみこと）」と彫られた字の上に、「〇」が彫られています。これは田に映る月を表わしています。

※地神様の詳しいことについては、ホームページ掲載の広報柏谷第14号「地神様を知っていますか」をご覧ください。

【参考資料・文献】
王城山六万部寺縁起 六万部寺
柏谷の地神様 佐藤信義
かんなみ仏の里美術館ホームページ
広報みしま 歴史の偉人ゆかりの地
函南町誌上巻 函南町誌編集委員会
函南町の文化財 文化財保護審議会
(栗青少)



※六万部寺の経塚は未発掘です

翌年、頼朝は伊豆権現にいた僧の学淵（がくえん）を招きました。頼朝は「私には願ひ事があり、法華経1000部の読経をしたいと思っています。やつと800部終わつたところですが、これを祝いたいのです。どうでしょうか。」と学淵に尋ねました。学淵は「それは良い事だと思います。あなたは、武運の神、八幡大菩薩の子孫であり、法華経の信者でもある。東武士を率いて平氏を滅ぼす、今がその好機です。これは法華経を800部読経をした功德である。」と答えました。頼朝はこの後、僧と共に読経を続け、6万部の偉業を示す事物を納めた経塚をこの地に築きました。

これが、六万部寺経塚の由来です。経塚は、六万部寺の山門を入った正面にあります。



山門に入って左側にある稲妻堂

六万部寺の北東に城山という山があり、遠くを眺めていました。そこには稲妻ヶ池という蓮華の花咲く青く澄みきった池があり、昔々神である龍が池の中でとぐろを巻いていたといわれています。ある日、頼朝のところにへ婦人に化けた龍がやってきて、「成仏できずにあんな世で苦しんでいます。」と告げました。頼朝は「私は六道衆生（ろくどうしゅじょう）のために法華経を読経する。これをよく聞くことだ。あなたの苦しみを取り除くためには他に方法はない。」と言いました。これにより、龍はついに成仏することができました。そこで、この龍をこの地にお祀りして「稲妻大明神」と名付けた。



稲妻大明神の像

蛇ヶ橋

～下田街道沿いに残された伝説～



源頼朝は、源氏再興祈願のため三島大社に足繁く参詣しました。頼朝の三島大社参詣にまつわる伝説は、下田街道沿いに多く残されており、蛇ヶ橋に伝わる話もその一つです。

「三島大社参詣の帰り道、現在の函南町間宮あたりで大雨に遭い、狩野川の支流に架かっていた橋が流されたため、頼朝が川を渡れずに困っていたところ、一本の丸太が流れ着いた。頼朝は、丸太を橋代わりにして急いで向こう岸へ渡った。渡った川を振り返ると、丸太は大蛇となって流れていった。」

三島大社参詣途上の伝説は町外にも多くあります。
妻塚(さいづか) 観音堂[東本町]・・・大庭景親が頼朝と間違つて自分の妻を斬ってしまった。
間眠(まどろみ) 神社[東本町]・・・頼朝が、百日祈願の途中、祠の松の下で仮眠をとった。
手無(てなし) 地蔵 [中]・・・頼朝が、まわりつく怪しい女の片腕を刀で切り落としたところ、女は地蔵だった。
右内(うない) 神社[梅名]・・・手洗い水がないため、頼朝が薙刀で参道の地面を突いたところ水が湧き出した。

区外でも探しました！